

論文の内容の要旨

論文題目：鄭清文とその時代：“本省人” エリート作家と戦後台湾アイデンティティの形成

氏名： 松崎寛子

台湾は十七世紀以来、オランダ植民統治、鄭氏政権と短期間による局地的支配を受けた後、清朝、日本、旧国民党による長期間の統治を経験した。このような長きに渡る外来政権による支配下において、台湾に住む人々は越境してくる外来政権の文化を積極的に受容しながらも、それらを抵抗の糧としつつ、自立の道を模索し続けた。そして 1980 年代前後に本格化した民主化運動を経て、1996 年台湾住民による総統直接選挙を実現し、台湾は民主化を達成したのである。

台湾は、戦前から台湾に住む本省人、戦後国民党と共に中国大陸から渡って来た外省人に分かれ、本省人は、人口の大多数を占める福建（閩南）系漢民族、客家系漢民族、そして上記漢民族系よりもはるか前からの住民とされる「原住民」からなり、多重族群社会を構成している。それぞれの人口比は 1992 年の時点で、福建（閩南）系 73.3%、客家系 12%、外省人 13%、原住民 1.7%（黄宣範『語言，社会與族群意識』1993）とされている。このような複雑な歴史背景も加わり、台湾アイデンティティについての台湾住民自身の意識は今も変化を続けているのである。このような台湾アイデンティティの状況を、国際政治学者の若林正文は「変容し躊躇するアイデンティティ」と定義する。

このような台湾アイデンティティ形成において、文学が果たした役割は大きい。五十年に及ぶ日本統治期には、日本語という国語で、そして戦後旧国民党統治期には北京語という国語で、台湾の文学者の

多くの者は、作品を書いた。特に日本語から北京語への国語の転換は、台湾の文学者にとって、アイデンティティの転換でもあったのだ。

鄭清文は日本統治期すなわち日本語国語体制下で小学校教育を終え、国民党統治期すなわち北京語国語体制下で中等教育から大学教育を受け、銀行員として勤務するかたわら、作家活動を行ってきた戦後第二世代作家である。日本でも『広辞苑』第六版（2008）が「ていせいぶん【鄭清文】」の項目で、「台湾の作家。農村と都市のさまざまな人生を描く。作「三本足の馬。」と記している。

本稿は、日本統治期に少年期を過ごし、戦後に中国語を身に付けた本省人エリートとして、鄭清文が、外省人で占められていた台湾文壇において活躍の場を徐々に広げながら、自らのアイデンティティを模索し続け、文学創作を通して台湾アイデンティティを形成していく過程を、その時代背景と合わせて考察するものである。1958年に中国語作家としてデビューした鄭清文は、1987年に吳三連文藝獎を獲得し、1999年には英訳作品集『Three-Legged Horse』がコロンビア大学から出版され、2005年には國家文藝獎を表彰される等、確実に作家としての評価を高めて行った。

日本統治期から旧国民党統治期を経て現在に至るまでの激動の台湾史は、鄭清文の作品にどのような影響を与えたのか。換言すれば、鄭は彼の見た台湾社会をどのように描いたのであろうか。そして鄭清文文学は、台湾社会でどのように受容されてきたのであろうか。本稿では、以上の問題点を踏まえながら、二つの時代、二つの言語を跨いだ台湾作家鄭清文とその時代史を考察したい。

第一章では、鄭清文の生い立ちと、1958年から1974年まで、鄭清文が文壇にデビューして以後の初期作品の流れについて論じる。鄭清文は1932年、日本統治期の台湾北西部に位置し、台北に隣接する農村、桃園に生まれ、一歳の時に新莊の叔父に養子に出される。農村の桃園と後に鄭の作品に登場する「旧鎮」新莊、この二つの家族と土地に育てられた経験は鄭の作品に大きな影響を与えている。

第二章では、1979年の作品「我要再回來唱歌（以下「唱歌」と省略）」を中心に、鄭清文の作品のなかでどのように台湾アイデンティティが語られるようになったかを分析する。「唱歌」において、伝統社会の価値観と女性の自己表現との衝突を語る時、何故鄭清文は「歌を歌うこと」を主題としたのかという問題を中心に論じる。そしてその主題に隠されている都市と農村との文化的格差、世代間の言語衝突の問題を検討する。「唱歌」が発表された1979年以降、鄭清文は自分が育った旧鎮を舞台にした自伝的要素の強い作品を数多く発表するが、同時に「不良老人」（1984）、「熠熠明星」（1985）、「報馬仔」（1987）、「來去公園飼魚」（1990）等、徐々に旧国民党政府を暗に批判する作品も発表するようになる。「唱歌」は、文化的格差から起こる衝突という初期鄭文学の主題を引き継ぎながら、世代間の言語衝突も描写する作品である。鄭清文は、「歌を歌う」という行為の描写を通して、旧国民党政府への批判を表そうとしたのではないか。1979年美麗島事件前後という台湾の時代情勢も、「唱歌」をターニングポイントと

して、台湾意識を作品の中で主張するようになった原因の一つとして、考察する。

第三章では、前章を受けて、1999年に台湾の高校国語教科書に採用された鄭清文「我要再回來唱歌」を例に、台湾国語教科書における台湾文学の受容とそれに伴う台湾アイデンティティの変容について検討する。まず、1996年現代台湾文学作品が初めて高校「国文」教科書に採用されるに至り、1999年「一綱多本」制への移行を経て、2005年に「一綱多本」に対応する指導要領を教育部が公布するまでの、台湾における高校「国文」教科書編纂の移り変わりを分析し、龍騰文化出版社版に収められた鄭清文「我要再回來唱歌」を例に、1999年に初めて民間出版社編纂の教科書に採用された現代台湾文学作品が、教師用指導書で如何に解釈されているか、そして2005年教育部の指導要領改定後にその解釈がどのように変化したかに注目する。同時に、高校「国文」教師の授業報告に基づき、「国文」教室の現場で台湾作家鄭清文の作品が具体的にどのように教授されているのかを考察する。

第四章では、鄭清文作品において描かれた日本統治期の記憶をめぐり、鄭の日本統治期の体験とその叙述が鄭のアイデンティティ形成に与えた影響について論じる。鄭の幼年時代はちょうど日本統治期と重なっており、その記憶は彼の短編小説「三脚馬」（1979）「髮」（1989）「蛤仔船」（1989）において語られていると言えよう。この三つの作品に共通しているのは、語り手「わたし」が一貫して傍観者であること、物語は「わたし」に他人から語り伝えられた話であること、主要登場人物は必ずスティグマを持っていること、そしてそのスティグマの犠牲となるのは、スティグマの持ち主が男性であるか女性であるかに関わらず、必ず女性であることである。奇形の手を持つ女性を描いた「校園裡的椰子樹」（1967）以来、鄭は長編小説「舊金山-1972」（1997）、童話「天燈・母親」（1997）等、いくつかの作品の登場人物にスティグマを持たせているが、鄭自身の幼年時代＝日本統治時代の記憶を描いた上記三作品にもスティグマを持つ人物を登場させたのは何故であろうか。また、鄭清文はヘミングウェイが自らの創作に大きな影響を与えていると述べているが、本章では、ヘミングウェイの作品における身体的欠如の扱い方が鄭清文作品における身体表象に与えた影響に注目する。そこから、植民地言語である日本語を通して英語を勉強した鄭清文が、どのようにヘミングウェイ作品から影響を受け、自身の創作に反映させたかを考察する。

第五章では、鄭清文が1990年から2001年にかけて発表した長編小説『舊金山（サンフランシスコ）一九七二』について論じる。彼は1972年、銀行実習勤務のためサンフランシスコに半年間滞在し、その経験を基に長編小説『舊金山一九七二』を執筆する。この長編小説には、鄭自身と思われる人物は登場せず、一人の台湾女性の留学生が鄭の在米経験に類似した体験を語っている。女性主人公は、米国において自分は何者であるかという意識をはっきり持てないまま、父や叔父およびボーイフレンドの意に反して台湾へ帰ることを決める。彼女の台湾への深い愛着は、家族の誰からも愛されない、鼻がつぶ

れた祖母に向けられるものであった。七〇年代は台湾にとってその国際的地位を揺るがされた時代であり、多くの台湾作家にとっても自分が何者であるかを模索する時代でもあった。

異国において自分のアイデンティティを模索する女性を描くことで、鄭は自身の台湾アイデンティティを表現したのではないか。鄭が同作の中でカミュの『異邦人』を取り上げているのに対し、本稿は、エドワード・サイードによるポストコロニアル的な視点からのカミュ批判を援用しつつ、鄭清文が当時日本語で『異邦人』を読むことによって「植民者」側によるカミュの解釈を受け入れた後、自らのアメリカ体験を踏まえてどのように「被植民地者」の立場から自らの『異邦人』解釈を作品に表したのかを考察する。

第六章では、鄭清文の文学作品が、現代の台湾社会においてノスタルジア文学として受容されている点について論じたい。鄭清文の初期作品である二編の短編小説、「苦瓜」（1968年）と「清明時節」（1969年）は、2010年に呉念真監督によって舞台劇『清明時節』に戯曲化された。本章では、鄭清文の文学作品が、文学テキストから演劇脚本へと改編され新しいテキストへと変容していく過程を、その時代背景も視野に入れながら検証する。さらに、1960年代の鄭文学が現代の舞台で60年代台湾社会へのノスタルジアとして再現されたことを考察した上で、鄭清文自身は後にどのように記憶の中の台湾へのノスタルジアを童話の中で再現したのかを論じる。

終章では、鄭清文とその時代について、台湾アイデンティティ形成の文化的社会的意義を総体的に検討し、その特徴を明らかにするとともに、鄭清文の作品が台湾社会にどのように受け入れられているかについて述べる。また台湾の歴史体験と集団の記憶が、文学作品の中でどのように描かれ、また書き換えられていくのかを検討する。